

令和2年度 第9回  
日野市教育委員会定例会議事録要旨

令和2年（2020年）12月10日

日野市教育委員会

令和2年度第9回日野市教育委員会定例会

開催日時 令和2年(2020年)12月10日(木)  
14時00分~15時14分

開催場所 506会議室

出席委員 教育長 米田 裕治 委員 高木 健夫  
委員 西田 敦子 委員 真野 広  
委員 東 桜子

欠席委員 なし

議事録署名委員 委員 東 桜子

事務局出席者 教育部長 村田 幹生 教育部参事 高橋 登  
教育部参事 志村 理恵 教育部参事 谷川 拓也  
(議事録作成) 庶務課長 伊藤 浩一 生涯学習課長 関 健史  
学校課長 久保田 博之 統括指導主事 田村 孝夫  
中央公民館長 佐藤 早苗 図書館長 飯倉 直子  
郷土資料館長 小林 正明 教育センター所長 正留 久巳  
指導主事 加藤 信秀

傍聴者 なし

書記 庶務課庶務係長 馬場 康二  
庶務課主事 大矢 千尋

議事内容 別紙のとおり

この議事録は事実と相違ないことを認め、ここに署名します。

議事録署名

委員

東 桜子

議事録署名

教育長

米田 裕治

## 議事内容

### 議案

- 第 3 5 号 教育委員会職員人事について
- 第 3 6 号 教職員の内申の専決処分について
- 第 3 7 号 教育委員会職員の分限休職の専決処分について

### 報告事項

- 第 2 2 号 令和 2 年度コロナ禍における事務局の取り組みについて

(議事の要旨)

開始 14時00分

[米田教育長]

ただいまから、令和2年度第9回教育委員会定例会を開会いたします。

本日の議事録署名は、東委員にお願いいたします。

本日の案件は、議案3件、報告事項1件です。

なお、議案第36号、議案第37号は、公開しない会議とし、会議の最後に審議したいと思いますが、よろしいでしょうか。

(「異議なし」の声あり)

[米田教育長]

異議なしと認め、議案第36号、議案第37号は、会議規則第10条の規定により、公開しない会議とし、会議の最後に審議します。

なお、新型コロナウイルス感染症の対策として、事務局説明員が随時、入退室をいたしますが、異議ございますでしょうか。

(「異議なし」の声あり)

[米田教育長]

異議なしと認め、事務局説明者が随時、入退室いたします。

議案第35号・教育委員会職員人事について、事務局より提案理由の説明をお願いします。

#### ○議案第35号 教育委員会職員人事について

[伊藤庶務課長]

庶務課長でございます。

議案書1ページをご覧ください。議案第35号・教育委員会職員人事についてご説明いたします。

提案理由でございます。教育委員会職員に対して人事発令を行うものです。

次ページをお開き願います。令和2年12月31日付け発令、1名。職層名、職員名、氏名等につきましては、記載のとおりでございます。

説明は以上でございます。よろしくご審議のほど、お願い申し上げます。

[米田教育長]

事務局からの説明が終了いたしました。ご質問がございましたら、お願いいたします。よろしいでしょうか。

なければ、ご意見を伺います。よろしいでしょうか。

なければ、ご質問、ご意見はこれにて終結いたします。

お諮りいたします。教育委員会職員人事についてを原案のとおり決することに異議ございませんか。

(「異議なし」の声あり)

[米田教育長]

異議なしと認めます。議案第35号は原案のとおり可決されました。

次に、報告事項第22号・令和2年度コロナ禍における事務局の取り組みについてとありますが、生涯学習機関、それから学校の取り組みも含めて事務局より報告をお願いいたします。

○報告事項第22号 令和2年度コロナ禍における事務局の取り組みについて

[関生涯学習課長]

コロナ禍における取組の紹介をさせていただきます。

まず、コロナの拡散防止を図るため、密を避ける取組、分散開催、それからネット配信ということで事業を行ってまいりました。

まず、5月予定の家庭教育学級につきましては、開催を延期いたしまして、12月4日から24日まで、インターネット配信という形で講座を公開してございます。当初、実施する先生に会場等をお願いをしていたところですが、コロナ禍の状況でございますので、インターネットで配信ということをお打診しましたら、快く受けいただきました。こちら初めの試みということで、非常に協力的にやっていただいて、新たな生涯学習の方向性が示されたものだと思っております。

また、1月に実施します成人式につきましては、会場を市民の森ふれあいホールで前回と同じように1回で約1,200人の対象者を集めてやることを考えておりましたが、コロナによりまして分散開催といたしました。学区域2つ、川の北側と南側に分けての開催ということで呼びかけをしております。事前に分散開催のお知らせを対象の新成人のみなさまに送りましたところ、ほぼ全員の方々が自分たちの同級生と顔合わせたいということで、この分散開催で分かれるような見込みとなっております。

また、今までは本市からのメッセージということで、会場で流していたものを、今回はインターネット配信を行います。新成人代表の方のインタビュー形式で行いました。これまでと違った形での広報ということで、コロナ禍の中で新成人の代表者も、何が自分たちでできるのかということを一生涯懸命考えていただいたところです。また、成人式のPR動画ということで、会場が違うこと、分散開催で行うこと、それからコロナの注意ということで、新成人の方が自ら画面に出て、みんなにメッセージを与えるというようなことで、かなり積極的な動きにもなっております。そういう中では、新たな成人式の方向性というか、これから実行委員会形式で行うような部分も芽生えてきたのかなと思っております。

このような状況でございます。

[佐藤中央公民館長]

中央公民館でございます。

[米田教育長]

お願いします。

[佐藤中央公民館長]

コロナ禍における取組ということでご報告をさせていただきます。

緊急事態宣言に伴う臨時休館になりましたのは、今年の4月9日から6月1日の2か月

間近になります。公民館機能が完全に止まったような気がいたしました。人がいない、利用者がいない寂しい時間を公民館職員も過ごしたことになります。

今後に向けて新しい生活様式というところで、新たな公民館事業について、職員も苦慮しながらいろいろな検討をこの段階で始めました。

そして6月2日に公民館再開宣言ということで、少しずつ公民館活動を再開しました。これは、公民館再開に向けたガイドライン等を作成して、利用者の方にも安全に利用いただけるサークル活動を継続していただく、そんな取組を進めてまいりました。

そして9月になりまして、これならできるかもしれないというところで、少しずつ前に進もうということで、職員の新たな挑戦が始まりました。その中で大きな事業として、5月に開催を予定しておりました公民館まつり、延期をさせていただく中で、第33回公民館まつりwithコロナ、オンラインで出会い・ふれあい・学びあい、新たな形での祭、オンラインを活用して利用者と一緒に楽しむ、そのような事業をすることができました。この公民館まつりにつきましては、11月8日の日にオープニングイベントということでスタートいたしまして、2月の末までサークル活動の動画をオンラインで映像をとどめておく、そしてテニスサークルとかの展示会などを継続することで、4か月間をお祭としてみんなで楽しもうという、そういう取組を継続しております。

また、大きな事業として、第14回ひのっ子シェフコンテスト、こちらも従来の方法ではなく、オンラインを活用しながら新たな組立てをいたしまして、成功に終わることができました。

このような中で、公民館もオンラインを活用しながら学びを止めないという、そういう気持ちを持って、職員が工夫をしながら公民館事業をコロナと付き合いながら進めております。今後も、そのような形でしっかり取組を進めていきたいと思っております。

以上でございます。

[飯倉図書館長]

図書館です。図書館のコロナ禍における取組についてご報告いたします。

図書館では、市民が求める本を提供することということにつきましては、止めることなく再開以降、取り組んでおります。これがまず基本でございます。

併せて、私どもはセーフティーネットだということを考えておまして、再開と同時に障害者サービスの対面朗読も再開いたしました。また、乳幼児を見られているご家庭の閉塞感も感じていたところですので、10月から乳幼児向けのおはなし会も再開しております。

また、高齢の方の行き場所がない、もしくは何か日々に張り合いがないといった声もありましたので、主に高齢者を対象にしたような読書会につきましても10月から再開しております。

感染予防ができるものについては再開、感染予防ができないものについては休止ということで、線を引ながらできることをやっているところでございます。

併せて、こういった状況ですので、オンラインを使っただけの取組ということについても、できるものには取り組んでおります。日野宿発見隊で延期をしておりました日野駅開業130年記念の講演会につきましては、12月1日からYouTubeを使いましてオンライ

ン配信を始めたところです。今後も、中央図書館耐震補強工事記念トークライブ、3月予定を延期としておりましたが、年が明けましたら、対面とオンライン、ハイブリッドの形で開催をしたいと考えております。できること、できないことを選びながら、取組としては止めることなく続けていきたいと思っております。

以上です。

[小林郷土資料館長]

郷土資料館でございます。郷土資料館も6月まで休館をしております、その間に教育センター、それから公民館職員と一致協力をして、草取りや木の剪定といった環境整備に努めてまいりました。

それから、事業的なところで言いますと、教育センターの郷土教育コーディネーターの呼びかけで、校務支援システムC4thのリンク集にあります郷土学習資料室で、生涯学習課、公民館、図書館、新選組のふるさと歴史館とともに参加をさせていただいております。各館が取り組んだ様々なコンテンツを、こちらに載せています。

郷土資料館が取り組みましたのは、1964年、東京オリンピックの際の月桂樹の植樹記念碑と、それから翌年、日野市市制施行のメタセコイアの植樹記念碑を紹介しました、東京オリンピックのレガシーというものを動画で載せております。

最近嬉しかったのは、これを題材にして、四小の4年生の先生が教材を自作で作っていただいて、それを授業で行っていただきました。これについても、C4thわくわく掲示板にアップをしていきたいと思っております。

同時に、郷土資料館のホームページでも動画等のコンテンツの配信をしております。郷土資料館、動画の取組をしていますということの日野市公式ラインで周知したところ、郷土資料館のホームページの閲覧数が約5倍になりました。結構反響があったと考えております。

同時に、展示について、QRコードを用いて、ご自分でお持ちのスマホ等で見るができる解説にも取り組んでおります。今、行っていたのは「明日に伝える戦争体験」、これは8月に行った館内のパネル展示です。それと、現在、郷土資料館内で行っている特別展「みんなのひの宝モノ語り展」、これは3章立ての構成になっておりまして、1章ずつ、3分程度の動画解説を行っております。これを行うことによって、展示のキャプションを自分で読むのとはまた違った理解が得られるのかなと考えております。

それと、職員が解説の工夫をするというところもよかった点だと考えています。

展示記録を館内で残すことができるというのも、メリットだと考えております。

そのほかにも、勝五郎調査団が毎年行っていた講演会などについては、ユーチューブを用いた動画配信などを行っております。

以上になります。

[正留教育センター所長]

教育センターからは、コロナ禍における、わかば教室の運営と指導の方法の新たな取組について報告をさせていただきます。

本年度、わかば教室の特性を捉えた主体的な学びの育成に向け指導方法の改善を図り、実施してまいりました。特に、コロナ禍で孤立感や不安感が高まる不登校児童生徒につい

ては、個に応じた指導の大切さが改めて認識できました。不登校になった状況については様々です。その子に応じた学び方を進めて、主体的な学びの姿勢を身につけさせ、「自分の未来を切り開く、『学びの力』を育成する」ことを狙いに進めてまいりました。子供たちには「命を大切に」を視点に、「自分を大切に！ 友達も大切に！」、それから「自他の尊重」を視点として、「友達のやりたいことを応援しよう！」とし、指導者は「児童・生徒のよさを認め掘り起こし、肯定感や自信につなげていく指導」「児童生徒の主体的な学びの姿勢をゆっくりと育み、児童・生徒のペースで前に進もう」をそれぞれの目標としました。

「教科」「e-ラーニング」指導では、中学生、小学生が同じ空間で学び、個々の理解に応じて複数の指導者で支援する。課題や問題についてはグループで解決方法などを考えたり教え合ったりする活動につなげていきたい、そういう視点で進めました。

「わかばタイム」これは「作文、スポーツ、音楽、栽培、美術・図工など」がありますが、体験活動を大切に、本年度については、特に表現活動での、自分の考えをまとめたり、工夫したりすることで課題解決を図る力を身につけさせることを狙いとしました。

「わかデミー」は本人の自主性を尊重し「これをやりたい」活動を展開するということを狙いに進めました。「わかデミー」の考え方については、本年度より取り入れております。

具体的な状況ですが、「教科」「e-ラーニング」指導では、一律一斉の指導から個々の理解に応じた指導に意欲的な取組につながった効果がありました。事例としては、プログラミングへの興味、関心を深く持って取り組んだ児童がいました。算数・数学では統計をパワポにまとめるなど発展的な活動が見られました。反面、コロナの対応でグループ学習が思うように進まなかった側面があります。

「わかばタイム」では、自分の表現したい主題を大切にして感性を育むことを支援の核とし、作品づくりをしました。結果、表現力のある伸び伸びした作品が多数見受けられました。特に俳句、焼き物、平面表現などでは、他者の作品のよさを感じ取って、それを感想にするというようなどころも見られました。

また、郷土資料館の協力もあって、平山陸稲の田植え、成長の観察など、学校ではできない活動もできました。

「わかデミー」では、水生生物の観察、植物の観察を、自分で目標を決めて取り組んだ児童・生徒もいました。もう一つは、「e-ラーニング」や「わかばタイム」で取り組んだ学習の発展を自分の課題として取り組んだ児童・生徒もいました。これらの活動についても、コロナの状況があり、自分と友達との活動を共有するところが少なかつたかなと思っております。

共通して言えるのは、異年齢の取組に刺激を受けて、自分もやってみたいというような目標を持った児童・生徒がいたということです。

今後の方向性ですが、教科、わかばタイム、わかデミーの3つの機能を一層連携させて進めていきたいと思っております。それから、表現活動については、主題を見つけ自己決定する、とても大切な活動だと改めて認識しておりますので、これも今後さらに積極的に取り組ませたいと思っております。

最後ですが、学習支援者、指導者の視点、スタンスで子供たちの活動や主体性の育ちが大きく変わるということを再認識しました。第三次日野市学校教育基本構想の具現化に向



けても有効であると思います。これらを基に、わかばの子供たちの成長につなげたいと思っております。

以上です。

[加藤指導主事]

私から、学校の移動教室の代替行事について説明いたします。

第5学年ですが、例年、山梨県の清里を中心に自然体験を中心にした宿泊的行事を実施しております。その代替行事としまして、潤徳小学校と日野第八小学校は、こどもの国でオリエンテーリングや牧場体験を、日野第五小学校、平山小学校、滝合小学校、東光寺小学校、仲田小学校の5校は、あきる野市の秋川国際マス釣り場で魚釣り体験を行っております。

こどもの国での牧場体験は、八ヶ岳移動教室の活動が楽しみだったという子供たちの思いと、体験学習を通して子供たちに命の大切さを感じてほしいという先生方の思いから実現しました。子供たちは、乳搾りの体験を行いました。初めて行った子供たちが多く、恐る恐る乳搾りを行う子もいました。その中で、乳牛に直接触れ、命の温かさを改めて感じていました。また、スタッフの方から乳牛の生涯についてお話をしていただき、命をいただくことについて考えるきっかけとなりました。

秋川国際マス釣り場での魚釣り体験は、子供たちに自然体験をさせたいという先生方の思いから実現しました。子供たちは、魚を釣ること、釣った魚を針から外して自分で網に入れること、釣った魚の内臓を出すところを見せてもらうこと、火を起こすこと、そしてその魚を焼いて食べるといったことを体験しました。釣った魚の下ごしらえ、はらわたを取る作業では、子供たちはスタッフの方の作業を興味津々と見詰めていました。また、魚が苦手な子供もいましたが、子供たち全員、釣った魚を食べることができました。また、魚のおかわりをしており、10匹以上食べた子供もいたようです。子供たちからは、魚釣り体験を通して、食料のありがたみや命の大切さを改めて感じる事ができた、いただきます、ごちそうさまをいいかげんに言っていたけれど、その言葉の意味や大切さを改めて知ることができたといった感想を持つことができていました。

当日は、多摩川漁協日野支部の皆様ボランティアとして支えていただきながら、活動を実施することができました。

引率された先生方からは、日野支部の組合員の皆様と子供たちの世代を超えた交流の様子に、先生方は温かいものを感じた、多くの価値を感じたという声がありました。

今回のコロナウイルス感染拡大の影響により、学校行事や校外学習の在り方について見直すきっかけとなりました。今回の代替行事は、各学校が子供たちにどんな力を身につけさせたいのか、そのためにどんな活動が有効なのかを考え、話し合い、実現しました。今回得られたことを生かし、再度教育活動の在り方を見直し、さらなる充実を図っていきたいと考えております。

以上になります。

[米田教育長]

ただいま説明員の方から説明をしていただきました。報告をしていただきました。ありがとうございました。

どうぞご質問、それからご意見がありましたら、お願いいたします。

[高木委員]

質問ではないのですが、意見ということで述べさせていただきたいと思います。今回、まさに未曾有の体験といいますか、コロナということで、全国一斉の学校休校要請等も含めて非常に多くの戸惑いといいますか、歴史的にはかつてあったかもしれませんが、実際、我々が体験するのは初めてであったわけです。1つには、休校中にも多く言われたことですけれども、場所というか、仕組みとしての学校の大切さ、そしてまた、学校に行くことによって先生や一緒に学ぶ友達がいるという、そういうことの日常、今まで何でもなかったことについて、当たり前だったことを、非常に大事だったということ、それは学校だけではなくて、いろいろなことについて気づかせてくれたというか、あるいは再認識させてくれたということがあったのかなと考えております。

特に学校については、基本的な権利としての教育の大切さというのは言うまでもないことですが、改めて学校という場所や機能について、やっぱり学校を止めてはならないということを広く認識をみんなで作ったのかなと思います。ですから、止めないための工夫なり努力を引き続きしていかなければいけないと強く感じております。

それから、私自身、2点目として、先ほど正留センター長からも言及がありましたが、日野市の第3次学校教育基本構想でうたっています「一律一斉の学びから自分に合った多様な学びと学び方へ」、それから「自分たちで考えを語り合いながら生み出す学び合いと活動へ」という、この考え方なり方針が今回のコロナ禍の下でより一層重要な、大切な取組であることが再認識というのか、理解ができつつあるなということ強く感じております。

今も具体的な報告があったわけですが、わかば教室での取組ですとか、各学校での移動教室、あるいは修学旅行に代わる代替の取組に当たっては、前例踏襲とか、あるいは従来慣行、慣例にとらわれない、児童生徒と先生たちが対話をしながら一生懸命、限られた制約の中で活動を生み出していくなど、今回の事例を踏まえまして、こういった第3次構想に基づいた運営化に向けて、さらなるステップアップを期待しているところであります。

それから、3点目として、いろんな場面が出てきているわけなのですが、ICTを活用したオンラインですとかネット配信等でも、学校教育ですとか、あるいは生涯学習活動が、このコロナ禍で、非常に一気に重要性が増しており、その特性を活用した運用が非常に大きく広がっているなということ強く感じております。従来からの集合ですとか対面を中心とした学校教育、あるいは生涯学習の取組は、ある種の限界も最近、関係者の間では強く感じている部分もあったわけなのですが、それを超越するというか、超えるものとしてのICTの活用が、今後に向けて期待しております。ここで日野市も非常に財政的な支援があって、GIGAスクール構想も一気に進むという、環境整備も進んでおりますので、関係者が持っているスキルだとかノウハウの共有化を図りながら、より効率的に進めていただきたいということを希望しております。そんな印象、感想を持っております。

以上です。

[米田教育長]

どうぞ、お願いします。

[真野委員]

私からは、まず、幼稚園の取組についてと、また、生徒会サミットの取組についてご報告をお願いしたいと思います。

[米田教育長]

では、幼稚園の取組について、学校課長のほうからお願いいたします。

[久保田学校課長]

学校課長でございます。それでは、コロナ禍における幼稚園の取組についてご報告申し上げます。

まず、幼稚園で大切にしたい事業の価値ということで、主なものとしましては、つながることの大切さ、それから、みんなの命を守るための知恵を出し合うこと、それから、不安を感じる保護者を支える役割を再認識というところで取り組んだものでございます。

まず、つながることの大切さということでございますけれども、休園期間中のご家庭への電話ですとかポスティング。このポスティングでは、年齢に応じた折り紙の折り方ですとか折り紙、迷路で書くと最後に絵になるという、そういうおうちで楽しめるものを入れたということでございました。

それから、みんなの命を守るための知恵を出し合うことということでは、園児に3密がなぜ避けなければいけないのかということ、教材を使って分かりやすく伝えたといいところでございます。それによって年少児でも手を洗う習慣ですとか、友達の間隔を適度に保つ、そういうことができるようになってきているということでございました。

それから、不安を感じる保護者を支える役割を再認識したということでは、保育カウンセラーとの個別相談、それから、通常、月に一度のカウンセリングですけれども、ミニ講演会ということで、通常1時間のところを30分に時間短縮ということで行って、あらかじめ保護者の皆様から、どういうことに不安がありますかというものを出示していただく。それを先生にお渡しして、当日、それも含めた講演をということであったそうでございます。具体的には、子育て全般ということでございますので、子供の叱り方をどうしたらいいのかとか、子供に自信をつけさせるためには、どういうふうに接したらいいのかとか、そのようなことがあったと伺っております。

今後に向けての考え方ということでございますけれども、コロナ禍という状況がよい方向に転じたとしても、市立幼稚園としての学校教育の始まりは幼児教育であるというところの部分は、しっかり考え方をぶれずに今後も引き続きやっていきたいということでございます。

以上でございます。

[米田教育長]

生徒会サミットの報告はいかがですか。お願いいたします。

[加藤指導主事]

生徒会サミットについて説明いたします。今年度の生徒会サミットは、一斉に全校が集まることを避け、市内中学校を4つのブロックに分けて活動を行っております。今年度は、「いま私たち中学生にできることは何か～地域の未来のために役立つ活動をやってみよう～」をテーマに、何を実践するか話し合いを行っております。子供たちは、他県や他市の人

から見て日野市が魅力的なまちであってほしいという願いを持っており、日野市のPR活動をしたいという思いを持っております。その中で、自分たちが意外と自分の住む地域について知らないことが多いということに気づきました。今、子供たちは観光案内マップの作成やまちの魅力を伝える広告づくりを目指し、活動に取り組んでいる状況でございます。

以上になります。

[米田教育長]

どうぞ、いろんな質問や意見を出していただいて。はい、どうぞ。

[真野委員]

ありがとうございました。コロナ禍で新しい取組をいただいているということに感謝を申し上げます。

私が報告を伺って感じた点を3点ほどお話ししたいと思うのですが、1点目は、今報告もありましたが、幼児教育から、3密というのが大切だという教育がスタートしているわけで、とすると、非常に人と人とのディスタンスを取るということが子供の頃からだんだん当たり前という形になってくるのかなと思うと、これから、自ら働きかけるというか、コミュニケーションを取ってつながりをつくっていく力というか、そういったところはすぐこれから大事になってくるのかなと思いますので、その辺も含めて、育成ということを考えていかねばならないと感じました。これが1点目です。

それから2点目は、生徒会サミットのお話もありましたが、伺っておりますのは、小中の連携というところで、やっぱり中学生が小学生にとってはいいお手本になると、こういうことを踏まえ、また、先ほどわかば教室でも、小中が同じ場で教育をしているという話もありました。そういう面では、あと私が伺った中で、運動会で高齢者施設との交流というお話も伺っております。そんなことを踏まえると、周りの人との関係というか、励ますことで、自分が励まされるというか、そういうつながりというか、刺激し合うというか、こういうことが非常に大事なのだなということを変更して感じまして、こういうことも大切にしていきたいなと思います。

それから3点目ですが、先生ご自身にとっても、新しい環境の中で新しいものをつくり上げるという、以前お話ししたことがあります、一期生という思いで取り組んでくださったなということを感じました。そういう面では、生徒とともに学ぶ機会になり、先生ご自身も新たな刺激を受ける機会になったのかなと感じております。

最近、私が読んだ本の中で少し紹介させていただきますと、遺伝子工学の第一人者、筑波大名誉教授の村上和雄先生がいらっしゃいますが、「スイッチ・オンの生き方」、お読みになった方も多いかと思いますが、その中で、こういうふうに言われています。人間は遺伝子レベルで見れば、学校の成績がよかろうが悪かろうが、体が強かろうが弱かろうが、99.5%以上は誰でも同じなんですと、こう言われているんです。私も、ここを見るたびに、人間の可能性というのは無限大なのだと感じますし、その能力に差があるとすれば、その遺伝子のスイッチがオンになっているかオフになっているかの違いなんですと言われているわけですが、どうすればオンになるのかというと、村上先生は、ある意味では、環境を変えてみるのが大切なんですと言われています。コロナ禍ということで非常に大変な状況ではありますが、視点を変えてみると、これまで経験したことない新たな環境に身

を置いているわけなので、そういう面では、いい遺伝子のスイッチをオンにする、そういう機会にもなっているのではないかなと考えて前向きに進んでいきたいなと、自分自身も感じております。

以上です。

[米田教育長]

いかがですか。

[東委員]

このコロナ禍における日野市の教育の取組としてお話を聞かせていただきました。コロナが2月、3月から大流行してから、まず学校教育として、1学期には一度学びが中断をしたという経験をしました。その時に学校の在り方はどうあるべきかということをおみんなで本気で考える時間をいただき、やっぱり学校はとても大切な場であるということをおみんなで認識することができました。体を思い切り動かすこと、自分だけの考えでなくて、他のお友達の考えに触れて学びを深めることができること、オンラインも模索することも大切でしたが、やはりリアルな学校の場で学びを進めることが間違いなく、教育の本質であるということをおみんなで認識できた1学期を過ごし、2学期にいろいろな体験や学校行事が行われてきました。私も各校に足を運ばせていただいたのですが、学校行事の考え方も、各校一律でなくてもよいという文化として根づいたことがすごくうれしいと思います。日光や八ヶ岳に今年も行った学校もあるし、その代替行事を別のもので行った学校もあるし、それは学校が子供たちと話をし、どういう風にしていきたいかということをお一緒に考えてできたことなので、とてもすばらしいことだなと思っています。

各校が工夫や知恵を合わせて、いろいろなことに挑戦してきた姿を見せていただきました。運動会では、どの学校も一つも同じやり方はなく、様々な方法を見せていただきました。

音楽会や展覧会もを見せていただきましたが、展覧会も今までの方法ではなく、学習発表会のように、本来の学びの姿をできるだけ多くの方に見てもらいたいというような発表の仕方や屋外の展示を挑戦されていた学校もあります。とてもすばしかったです。

先ほどの代替行事に関しては、子供たちと先生が本当に学校を遊び倒して、楽しんで企画をつくって、学校宿泊という新しい形をつくり、コロナは新しいものを生み出すチャンスを与えてくれたなと改めて思いました。先生と子供たちが自ら作り出していくわくわくというのは、心にいつまでも残る思い出と学びになったと思います。私も現場に足を運んで先生とお話をし、生み出す苦労と喜びも一緒に持ち合わせていたという言葉をおいただきましたので、今までの当たり前を崩すような何かが動き始めたのかなと感じました。そのことこそが日野市の財産になったかなと思います。

以上です。

[西田委員]

ただいまコロナ禍における事務局の取組について、様々なお話を伺いました。

まず、生涯学習ですけれども、安全を確保しながら職員の熱意と工夫、そしてオンラインを積極的に活用して様々な企画がなされて、それが想像以上の成果を上げているということにとてもうれしく思いました。感謝したいと思います。

次、学校教育ですけれども、新型コロナによって今まで行ってきた教育活動が大きな制約を受けざるを得ない状況になりました。先生方は、改めてその活動は何のために行ってきたのか、どんな力をつけるために行ってきたのか振り返って、確認されています。それを基に、それではこの状況の下でどんなことができるのか、どんなことをしたいか、それを子供と一緒に考えました。このことはとても大きな意義あることだったと思います。子供と一緒に考えるところから新しい発想とか、創造的で新鮮な活動が生まれてきているように思いました。まさに、先生と子供でつくり上げるよい活動だと思いました。

例えば、各学校の運動会にしても、作品発表会にしても、新しいアイデアが生まれていました。どれもコロナ禍だからといって弱々しいものではなく、本当に子供が生き生きと輝いていて、力強くて光っている、これは何なんだろうと思いました。それは、今までどちらかというときせられていた活動が、そうでなく、自分が本当に取り組んでいくんだという、そのエネルギーが発散しているのだと思いました。先生方も子供たちの力を出そうという、その意欲に燃えていたからだと思いました。

また、今お話伺いましたが、例えばブロックごとに分けた生徒会サミットですが、今、自分たちができることは何だろうかということ地域に目を向けて一生懸命考えている。これも言うてみれば、ブロックに分けたことでより地域に愛着が感じられて、地域のことを一生懸命考えることから新しい発想が生まれてきたに違いないと思いました。

それから、各学校でキャンプファイアや防災キャンプも行われておりましたし、それから宿泊行事の代替として、マス釣り体験だとか、牧場体験だとか、それから、わかばの栽培活動など、命に触れる貴重な体験をしている、これも新しい発想で、よい活動が生まれてきたと思いました。

このような工夫から、新しい形で生まれてきたものは、今後も教育活動の中に活かされていくもの、財産として残っていくものと思えます。

それから、最後ですけど、インターネット配信することが、ここで急に当たり前になってきているように感じています。少し抵抗があったものが、抵抗がなくなって、それが当たり前になっている。今後一層進んでいくものと期待しています。

以上です。

[米田教育長]

両参事、どうですか。

[高橋参事]

生涯学習ですけれども、私も異動してきて半年ぐらいの中で、コロナで巡り会えた中で、正直、生涯学習の目的は何なのかみたいな話を、すごいぐるぐる回りました。学校は義務教育だったりするので、生涯学習、言っては悪いですけど、なくてもいいのかな、やらなくてもいいのかなというようなことだと思えます。ただ、逆に義務じゃないからこそ、止めても駄目だし、やめても駄目なのかなという気がしたので、そういう中で形を変えてもいいし、何か短くてもいいから、やっぱり細々と続ける、やめないということが大切なかな。コロナ禍では、どうしてもあそこはオンラインに行ってしまうのですけども、そういう中でオンラインをやってみると、オンラインのよさというのも十分に分かったし、でも、やはりオンラインをやればやるほど、対面、リアルのよさというのも、先ほど日常の

大切さという話もありましたけど、そういうのが実感できたのかなと思います。

そういう中で、今後、両方のよさを生かして、引き続き、止めない、やめないという中での取組を工夫しながらやらせていただきたいなということを思って、大きな話でいうと、つながりや喜び、または生きる希望、わくわく感ということになってくるのかな。義務じゃないからこそ、そういう形ができるのかなと思った約1年でした。

以上です。

[谷川参事]

学校教育では、先生方が行事の本質、狙いは何だったんだろうとか、子供たちにどんな経験をさせたいんだろうかということを深く考えるいい機会になったなと思いました。

それから、全ての行事において、どの行事を、全ての行事ができないという状況があったので取捨選択をしなければならない、そういった環境の中で、行事の価値を考えていったというようなところで、学校教育の全てのデザインを先生方が考えることができたんじゃないのかなと思いました。

何校かで宿泊行事というか、学校に泊まるような活動を行っていますけれども、そこでは先生方が指導者として子供たちと向き合うというよりも、むしろ先生たちも子供たちに寄り添って一つの行事をつくり上げていくような活動というか、姿勢がすごく大きかったんじゃないのかなと思います。これは、子供たちに寄り添いながら共に学ぶというのは、教員としての本来の姿だったんじゃないのかな、理想の姿だったんじゃないのかなと思いました。それがこういう形で一つは実現でき、子供たちと先生たちの中で非常に充実感を感じることができたというのは、今後の教科の指導の中でも、これは生きるんじゃないかな。先生は指導する立場ではなくて、指導する立場なんです。共に学ぶ立場なんだという意識を持つことで、授業の進め方やこれからの子供たちの成長に関わる立ち方が変わるんじゃないかなという、一つのチャンスをいただいたんじゃないかなと私は思っています。

来年度の教育課程のカリキュラムの編成は、もっと柔軟に、学校の先生方のよさが生きるようなカリキュラムが組めるように、こちらも応援していきたいと考えています。

以上でございます。

[米田教育長]

あと、どうですか、いかがですか。よろしいですか。どうぞ。

[西田委員]

今、先生のお話を聞いていて、授業も確かにそういうふうに変ってきているなという実感をこここのところ強くしています。それから、いろんな行事を先生たちが考え直し、生徒たちと一緒に考えることによって、そういう姿勢の中から、授業そのものも変わってきているなという気がするのです。これからは期待できると思いました。

[米田教育長]

どうぞ。

[田村統括指導主事]

コロナというところで、従前やっていた行事、授業というようなところがあると思うんですけども、そここのところで私が一番感じたところは、今までは、この行事は何月にやるからというところ、先生方、何も考えずにやっていたんですけども、思うようにできな

いというところがあるからこそ、要するに、保護者と話をしたり、対話をしたりとか、子供と話をしているというようなところで、日野市が目指す対話というところが、コロナだからこそ、より対話ができてきているのかなと思っているところです。

対話をすることによって、子供たちは、やらされ感じゃなくて自分たちでつくっていくというような思いというところで、できないものもあったんだけど、自分たちでこの行事はつくった、授業はこういうふうにつくってきたんだという、そういった思い出というものが残っている1年になったのかなと改めて感じました。

あと、これは感想になってしまいうんですけど、自分がすごくよかったなと思ったところで言うと、日野第四中学校の合唱祭のところで、ふだんであれば保護者、見られるんですけど、見られない方はどうしたかという、Webで配信、映像じゃないんですけど、音だけ配信なんですけども、これをやったことによって、遠くにいるおじいちゃん、おばあちゃんも聞いて、感動というのがよりいっぱい広がったのかなというところで、よいところがいっぱいあったのかなという1年だったと思います。

以上です。

[志村参事]

私も感想という形で、今回、コロナでいろいろ出てきているんですが、本当に私もいろんなことを発見したなというふうに思います。この何か月間、学校がなかった間に、メールももちろん留守にしていたんですが、特別支援学級の子たちは受け入れていただいてやっていました。先生たちとそういうところで連絡が取れて、先生たちが本当に子供たちのことをよく見ているんだなって。この子はこういう子なので、こういうところがというような形でお話があったりして。あとは、なかなか勉強ができない子たちに、どういった勉強をしたほうがいいですかねみたいな形のご相談があったということで、そういうところで、学校の中が私はすごく、この一、二か月でよく見えたなというのが感想でした。コロナでこういったところが特に見えました。

[村田部長]

全ての施設や事業がお休みでできないところからスタートをして、だからこそ、改めてそれぞれ事業が、いかに市民の皆さんに密着していて、なくてはならないものなのかということを感じました。

その中で、学校だけではなくて、例えば学童クラブであったりとか、保健衛生の部分であったりとか、いろいろな協力とか、そういうものの中で少しずつ今の形に戻ることができたのかなと思います。感染対策というものから、まず基本の役割をしっかりと継続したいなと思っています。

また、できる、できないのところから考えられたことで、やっぱり根本に立ち返られたんだと思うんですね。これは多分、これから社会が大きく変わっていきますから、子供たちには必要な力だと思いますし、私たちも前例にとらわれず、変えるべきところは私たちの責任として変えていきたいなと感じました。きっとこれからの社会は、戻るところと戻らないところがあって、働き方なんかも大分変わってくるんだと思うんです。新しい社会の中で、子供たちが生きていく力というのは何なのかなということをしっかり考えて、直接的な教育の部分、学校の部分もそうですし、それをバックアップする教育委員会として



も一緒に力を合わせて考えていきたいと思います。ご意見ありがとうございました。

[米田教育長]

ありがとうございました。生涯学習部門、それから学校教育部門、本当にこのコロナの中でいろいろなことを考えて、いろいろな願いを重ね合わせて、そして、一生懸命進んできたのかなと思います。そのことが今日、この中で大いに語り合えたのかなと思います。

生涯学習に関わるメンバーも、それから学校の先生も非常に生き生きしていました。例えば学校宿泊をやっている学校の中では、先生たちが実に楽しそうに生き生きしていました。そして、一人一人の先生が一番特徴的な部分が発揮されて、それをみんながバトンをつないで、みんなでつくっていくという、ああいう姿は今までなかったと思います。そういう意味では、子供と一緒に作り上げていく、それから生涯学習部門では、やっぱり人というのは学んで、表現し、そしてつながり合って、自分の人生を楽しく自分のものにしていくんだという、その願いをどうかなえていくか。それによって、職員がすごい元気ももらっていたんですね。その元気でまた職員は頑張っていたらっしゃいました。コロナは、本当にいろいろなことを教えてくれたというふうに思います。

例えば、学校では新しいチャレンジをしましたので、たくさんホームページにその情報を載せました。多くの保護者の方が、そのホームページを見に来てくれたんですね。ある学校は、すごい数のホームページの閲覧者の数を聞きました。やっぱりそういう意味で、その中で学校で生まれたことをそういう形で共有していく。それから、そのときに一番人々を動かしたのは、子供たちの姿と、子供たちの内から出てきた言葉を載せると、いろんな思いを見た人が、いろんなことを自分の中でもう一度考える。

それからもう一つは、先生が、そこで気づいたことであるとか、つかんだことをホームページに載せ出しているんですね。今までは、何々をしましたという、そういうホームページのブログでした。それから質が変わろうとしています。そこで得たことを、どうしたら伝えられるか、そういうことかなと思います。

また、改めて、年度の終わりに向かって、例えば小学校6年生は終わりの会をどう持つかという、今、そんな話合いが子供たちと先生から始まったんだという、そのプロセスをホームページでいろんな方と共有をする。ある意味、対話の入り口にもなるのかなと受け止めています。

そういう意味で言えば、より多くの方と共につくっていききたい。子供たちと先生の取組を今度は保護者と共にいろんな新しいものをつくっていききたいという、そんな取組が始まろうとしていますし、もうそういうことが始まっています。

また、生涯学習部門では、より多くの横のネットワークが広がって、日野に住んでいる人々の地域性であるとか、年齢層であるとか、そういう願いをさらにこのコロナの中でどう実現していけるのかという、そういうチャレンジ第2ステージが始まっていると思います。

オンラインであるとかICTというのは、今までできなかったことが実現するんですね。ゼロだったものが1として形に表れるんです。ゼロと1の倍率は無限大ですね。そこには無限大の感動が生まれます。今までできなかったことができるという、この感動が。ただ、そのオンライン上の1は、やっぱり1でもあるんですね。本当のリアルというの

は、もっとたくさんのいろんなことが複合的に大きなものとして現実のリアルがある。

各委員さん、それから事務局の職員が話をされていました可能性について、これからどんどん、もっと可能性については追求していこう。とともに、やっぱりオンラインではできないことについては、そこについても目を向けていこう。人の本質、我々が目指している活動の本質は何かということを中心に問い続けながら、生涯学習部門も、学校教育部門も進んでいくんだなと改めて分かりました。ありがとうございました。

思い起こせば、令和2年5月24日に定例会協議をいただいて、そして6月11日、議案として基本的な考え方を示しました。新型コロナウイルス感染症に伴う臨時休業期間中及び今後の対策で得たものについて、児童生徒、教員、教育委員会、地域の財産としていく。限られた学習時間をより効果的な時間とし、子供たちの主体的な学びを推進するため、教員は子供とともに学ぶ教師、子供を新たな学びに導く教師へとさらに意識を高めて教育活動を推進していく。併せて、この精神は、生涯学習においても全く同じだと思います。改めて、今日までの活動に感謝をするとともに、これからさらに私たちの活動を発展させていきたいと思いました。

ほかに何かございますでしょうか。よろしいでしょうか。

なければ、報告事項第22号を終了いたします。

これより、議案第36号、議案第37号の審議に入りますが、本件につきましては、公開しない会議といたしますので、関係職員以外の事務局職員は退席しても差し支えないと思います。異議ございませんか。

(「異議なし」の声あり)

[米田教育長]

異議なしと認めます。関係職員以外の事務局説明員は退席をしてください。なお、本件の終了をもって、令和2年度第9回教育委員会定例会を閉会といたします。

(関係職員以外退室)

「教職員の内申の専決処分について」

「教育委員会職員の分限休職の専決処分について」

は公開しない会議の中で審議

[米田教育長]

以上をもちまして、本日の案件はすべて終了いたしました。これにて、令和2年度第9回教育委員会定例会を閉会いたします。

閉会 15時14分